

# 兵庫県現代詩協会 会報 44号 2018年12月1日 発行：たかとう匡子

## ◇二〇一八年度「詩のフェスタひょうご」 ・盛会のうちに終わる（報告）

第一部講演会・講師 伊藤比呂美氏

第二部対談・伊藤比呂美氏×平田俊子氏

第三部朗誦会

十月十四日、ラッセホール・サンフラワーにおいて二〇一八年度詩のフェスタが行われた。今年度は県政一五〇周年記念イベントとして企画、準備した。例年は、講演会と自作詩朗誦会を行うのだが、伊藤比呂美さんの講演、更に伊藤比呂美さんと平田俊子さんの対談、自作詩朗誦会を企画した。参加申し込みは事務局に連絡が入るが、講師両氏がツイッターなどで告知してくださり、また、今年度より協会のホームページが開かれたこともあり、開催直前までメールや電話でうれしい忙しさだった。

十三時より尾崎美紀さんの司会で開始し、たかとう匡子会長の開会の挨拶につづき、伊藤比呂美さんによる「カタウ ウタウ ノロウ」の演題で講演が始まった。語りかけるような講演で、参加者との距離を感じさせないお話しぶりに、皆、引き込まれていった。伊藤さんの言葉は肉体化していて、観念ではないことばの響きに魅了された。朗読もずんずん胸に入り込んでいく。（講演内容については別欄に掲載）あつという間の一時間だった。

その後、伊藤さんと平田さんとの対談が「詩を生きるということ」と言うテーマで行われた。こちらの配慮が足りなく、ステージを設けなかったので、お座り

になると後ろの方に見えないのではと、講師からご配慮をされ、お立ちになって対談をされた。お二人の異なる個性が発揮され、また、お互いに尊重し合い、とても良い対談となった。対談もお話に引き込まれてあつという間に終わった。しかし、詩の芯はしっかりと受け止められた対談であった。平田さんは、昨年も詩のフェスタに講師としてお越しくださり、今年も是非というリクエストに応じてくださった。

第三部自作詩朗誦会は北野和博さんの司会で進行された。当初、十四人の応募で時間内に収まるか懸念していたが、十三人の朗読者がスムーズに行ってくださり、ぴつたり予定時間に終了した。朗読参加者は岡山、和歌山、京都、大阪からと広範囲から応募された。

時里二郎副会長が終わりの挨拶をして、全てのプログラムが無事終わった。その後、兵庫県現代詩協会主催の懇親会が地下一階バンジーで行われた。懇親会でも伊藤さんはパワーを発揮してくださり気づかいの一面を伺わせてくれた。平田さんも伊藤さんもその後の二次会までお付き合いくださり、楽しい時間を過ごした。

自作詩朗誦会参加者／李沙英・いちかわかずみ・岸本嘉名男・香山雅代・日高美里・斎藤恵子・高木敏克・中尾彰秀・ナイロンきやむはむ・藤井雅人・山下輝代・山本真弓・安森ソノ子（敬称略）以上十三名。

詩のフェスタひょうご参加者数 一四四名（内会員四十九名）。

懇親会参加者数 三十一名。

（報告・神田 さよ）

## 第8回 Poem & Art Collection

会期2019年1月17日(木)～22日(火)15時

期間中 平日10時～17時(土・日は9時～17時)

会場 神戸文学館 〒657-0838 神戸市灘区王子町 3-1-2 Tel 078-882-2028

— 内容 —

☆ポエム&アートコレクション・兵庫県現代詩協会会員による詩・アート作品（絵画、書、オブジェ等の展示）

☆兵庫・詩の現在展(会員の詩集・詩誌展示) ※本年度も多くの優れた詩集・作品集が出版されています。

☆特別交流イベント(2019年1月19日土曜日14時～) 講演「兵庫・神戸を生きた詩人を語る Vol.6」

※たかとう匡子が杉山平一について講演します。演題は「杉山平一、方法意識の強い抒情詩人—気骨ある「四季」派の最後の詩人」です。杉山平一(1914～2012)さんは、雑誌「四季」にふれ詩作をはじめ、三好達治、立原道造、中原中からの詩から自らを鍛えあげた詩人です。「四季」派に育てられた最後の詩人といえます。ずっと関西在住で、当協会の顧問も長くされて、映画評論家としても映画と詩を結びつけ、方法論的には近代の築きあげた抒情詩を戦後の社会のなかで深化させました。

(担当・丸田礼子/和比古)

## ◇伊藤比呂美さん講演 演題『カタる、ウタう、ノロう』

### ◇伊藤比呂美さん×平田俊子さん対談 タイトル『詩を生きたらということ』 講演趣旨ならびに対談趣旨

今回の「詩のフェスタひょうご」における講演の部は、大変、贅沢な形となった。すなわち、伊藤比呂美さんの講演を第一部とし、引き続き、盟友と言える平田俊子さんとの対談も第二部として催されたのである。ちなみに、平田さんは、前回二〇一七年度の「詩のフェスタひょうご」にお招きした講演者でもある。そして、昨年の参加者は、一層心を躍らして本年も来場したはずである。

さて、「詩は病である。詩人にしても詩の読者にしても、病人である」との挑発的な宣言から、第一部の講演は始まった。

教養としての詩が語られるのではなく、これから、言葉を食べた生き物にとつてのいわば業と救いの次元で詩というものが突き付けられるのだなど、われわれは直感でできた。何らか身につまされて柔らかな笑い声が起こる一方で、期待感と緊張感とに、会場は一気に包まれた。伊藤さんの手元に、準備稿はない。

基本的に、生活履歴とともにそのつど訪れた言葉をめぐるさまざまな原体験を軸にして、話は進んでいく。そのなかでも、九〇年代から十数年間にわたる異国アメリカでの生活を通して為された経験が、決定的だったようである。それは、日本語喪失の危機と、先住民であるインディアンに詠われてきた詩との出会いである。

こうした過程を経て、言葉の再発見に至る。『古事記』や、とりわけ説教節に、伊藤さん自身にとつての現代詩の原点が見出される。そして、その本質は「カタリ」にあると確信される。

ここで、演題の意味するところが、(現代)詩を構成する根本的な三要素として解き明かされる。筆者が理解したところでは、次のとおりである。

まずは、「カタる」とは、生まれてきた誰かがそれぞれに生きていって死んでいく、その具体的な事実内容を語る、ということ。そして、「ウタう」とは、高いもの(超越した次元)へと声を届かせる、ということ。さらに、「ノロう」とは、言(こと)を発すること(こと)を動かす、ということ。

ただし、これら三要素の連関についてまでは語られなかった。因果関係とか併存関係とかではなく、いわば三位一体として事実的に起こっているのだらうと、筆者には推測される。

後半に入ってから、朗読を聴かせていただく機会にも恵まれた。「カタリ」の典型と見なされる説教節の『小栗判官』における「道行き」の件の、原文ならびに伊藤さん自身によるその現代語訳の朗読を挟んで、次の三篇が詠われた。

『河原荒草』(二〇〇五年、思潮社)から、「道行き」。「あたしはあんじゆひめ子である」(一九九三年、思潮社)から、「ナシテ、モーネン」。そして、最新刊の『たそがれてゆく子さん』(二〇一八年、中央公論新社)から、「なつのおわり。あきのはじめ」。

小刻みに体をスイングさせながら激しく遣される息を伝つて、言葉が届いてきた。「カタる」とはこういうことなのかと、目の覚める思いがした。テクニクの種類ではなく、いわば言葉の霊が乗り移つて、伊藤さん全体を動かしているのだらう。

こうして大きな拍手とともに講演は終了し、次いで、五分ほどの休憩の後に第二部の対談が始まっ



左・伊藤比呂美

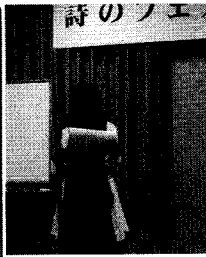
右・平田俊子

登場されて並び立ったお二人は、もうそれだけで、どことなく嬉しそうである。また、われわれにとつても、視界に届くよう終始ご起立されてお話しくださったこととは、ありがたく、嬉しかったのであった。

対談にあたっての両者の役割関係は、漫才の形式に喩えれば、ボケ役の伊藤さんに対して平田さんがツツコミを入れていく、ということでもよかったらうか。つまり、平田さんが引かれたおまかなラインに沿って、伊藤さんから力強い主張や率直な告白が引き出され、さらにそれに対する平田さん独自の批評に動かされて、豊かな展開が仕組まれていく。

このような具合に和やかで自由な雰囲気では対談は進んでいったのだが、しかし、そこで問われた事柄は、いづれも深刻にして重大なものとして思い出されてくる。とりわけ中心となる二点だけに絞って、確認しておきたい。

一つは、「詩は、教えたり教わったりする(するべき、できる)ものなのだろうか」という問いである。お二人ともに、現在は大学等で実作を指導する立場なのであるが、そればかりでなく、かつてのご自身の詩の学びの事情に關しても回顧された。そして、その答えは、簡単に得られなかったように記憶している。



詩のフェスタ朗読者

上・斎藤恵子  
下・藤井雅人

(報告・神尾 和寿)

ただし、答えを探るなかで、予感される方向性は示された。それは、詩作する主体を最優先に尊重しながらも、同時に、客観的な視点も提供して意識させてやる、ということである。たしかに、この両面をみずから併せ持っていることが、完成された詩人には要求されるだろう。また、「書く」の前提となる「読む」ということであれば、学校の国語授業での詩教育は貴重であることを、平田さんは強調されていた。

もう一つは、対談のテーマであった「詩を生きたるということ」に関わる。問いの形式を整えれば、「生きたるということ」に、詩はどのように関わっているのだろうか。さらに突き詰めて問えば、「詩なくして、生きたるということ」は成立するのだろうか。

この問いに対する答えに関しては、お二人とも明快であった。すなわち、成立しない。真に生きたるということは、詩を生きたるということに他ならない、のである。お二人自身の活動の歴史を遡って確認するのみならず、石牟礼道子さんや辻征夫さんらの活動ならびに発言にも言及しながら、こうした結論に至っていた。「常に、書く、という意識が私にはある。そして、自分が書いたものは、結局のところ、すべて詩である」と、伊藤さんは断言されていた。

はたして、このお二人は、特殊なのであるか。筆者には、そうは思えない。誰もが、この問いと答えとの間にいるのではないだろうか。ただし、自覚や覚悟という点で、いまだ不十分なのかもしれない。そして、その時までわれわれをずっと待ち続けている言葉の核心こそ、詩と呼ぶにふさわしいものなのかと思う。

## ◆第十四回読書会 伊藤比呂美の詩について

二〇一八年七月二十八日 私学会館  
チューター 寺田 操

二〇一八年七月二十八日私学会館において、第十四回読書会が寺田操さんを報告者として開かれた。

詩を書き始める時、出合いはとても大事になる。伊藤比呂美は「新日本文学学校」を受講したときの講師阿部岩夫に出会い、その詩に惹きつけられ、詩を書く動機になったと口火をきり、作品についていねいに話された。

作品を評価する時、「ほめ殺し」というものがあるが、阿部の批評はそうだった。その後阿部岩夫と藤井貞和発行の同人誌「詩を織る」や「壹拾壹」(佐々木幹郎、清水哲男、ねじめ正一、藤井貞和、吉増剛造等同人)に創刊同人として参加している。有名な伊藤の作品「カノコ殺し」は二五〇行の詩でリフレインが絶妙で自動記述で書かれていたが計算されている。母性神話と闘っているようだ。作品として過激なようだが封印していることを書いてくれると読み手もそれに吸い込まれる。また、現代音楽のパフォーマンスや口承伝承のスタイルをみつけ、後の「説経節」や「般若心経」や「日本霊異記」などに会おう下地になる。

関東では「ひ」を発音すると「し」となる。朗読は活字と文がびつたりしているが、イントネーションでは活字は表せない。言葉は生きもので流動的だから、消えゆく音、消されていく音、混じりあって生まれる音がある。変遷していく音の存在に気づかされる。音声文字として書くことは、表意文字とは同じではない。「朗読」で言葉を通して体感し、語りをベースに感覚を総動員している。

作品「小田急線喜多見駅付近」のように関東の人は地名を書く人が多い。また「ポーランド一触発」は戒厳令下に実際に渡り書いたものである。阿部岩夫は「伊藤の詩はユニークでかわだつていた。行わけ詩あり、散文詩あり、朗読が大変上手だった」と言っている。

「この家には階段がある」を「この家には怪談がある」と読み違えてしまうのは、生老病死が堆積している「語り」と「騙り」が存在の淵から原初へと降りていく怪談だと考えているからか。「わたしはあんじゅひめこである」は、怖くて残酷な昔話のような詩篇で読み手に思考する時間を与えず、語り手の強い意志を感じる。語り口は説経節である。読者を置いてけぼりにしてしまう。怖いけど美しい。美しいけど怖い。伊藤の詩は性のことが前に出ているが、初めからそういうテーマにしているわけではない。

『日本霊異記』VS比呂美』とげ抜き 新巢鴨地獄縁起』というこの作品は散文と詩を一つの鍋に入れて熟成させているようだ。古典からの本歌取りだが、そうは感じさせない手法である。地表から地下へ、表層から深層へと神話的空間が見えてくる。私的生活をさらけ出すのは本歌取りをとると自分のことであっても自分のことではないように感じられるいい方法である。何度も再生され記憶を映像化している。また、伊藤比呂美はとんとん、言葉と格闘する詩人であると言えよう。身体を使い、頭をクリヤーにして、自分を、言葉を、ぎりぎりまで追い詰り、蕩尽して、脱皮する。「般若心経」の新訳とエッセーは別々のものではなく、新訳の「アウラ」であろう。介護の現実、生老病死の現実、厄災、身近な素材を書くことで心のなかに溜まっている澱を一気に噴き出す。カタルシスを得ていく。溜飲下っていく。読み解き経本は「詩」であった。生活の中で翻訳とエッセーは結びついている。経本に魅かれた理由は書かれている音だ。

「人の声、草木の声／ひとはどこから来て、どこにゆくのか」の「川原の婆」は一所不在の川原の婆だが、誰の内にも棲みつき、詩人の身体をやかにして外部へと出現する。ネットの無い時代のユーチューバーのような書き手だ。最後に石牟礼道子さんを描いた『良い死に方、悪い死に方詩人は死を凝視する事』を朗読され、報告者の寺田操さんは「伊藤さんのようにできない、なれない、なりたくないけど、どんどん惹きつけられて次へ次へと読んでしまうのが彼女の詩の世界である。」と締めくくった。

伊藤比呂美の詩は一人で読み解くことは大変困難だが、理論的に分析され詳細なテキストを提示されたこ

第6回 文学紀行 《神戸・平野界限を巡る》

平野を歩けば日本の歴史がわかる。文学人も暮らした平野。
会員の方も、会員以外の方もどうぞふるってご参加ください。

2019年3月17日(日) 雨天決行

◎集合10時集合 神戸地下鉄大倉山駅改札口

終着12:30 三ノ宮スペイン料理「カルメン」にて昼食

◎参加費 2,000円(カルメンでの昼食代含む。途中のバス代は個人負担)

◎ナビゲーター・玉川侑香

※行程※

⇒10:00 地下鉄大倉山駅・大倉山・伊藤博文銅像。神戸空襲慰霊碑台座見学。五郎池・十郎池跡。

⇒10:30 昇天教会。平清盛・浄海入道像。富田碎花の歌碑。湊川上温泉(湊山温泉)。

⇒11:00 祇園神社・塞ノ神・祇園遺跡(円池遺構)。平野村北西の道祖神。六道の辻。祥福寺。

⇒11:30 五宮神社。愛隣館跡。楠正成終焉の地 ⇒12:15 三宮町1丁目⇒カルメンにて昼食

◎参加申し込み 44号会報に同封の葉書【私製】に切手を貼って申込をしてください。

※締め切り 3月11日(月)

文学紀行担当・玉川侑香 〒652-0015 神戸市兵庫区下祇園町15-5

電話 078-361-1334 携帯(当日のみ) 090-7102-2002

とで伊藤比呂美の世界に連れて行ってもらえた気がした。「詩のフェスタ」で伊藤比呂美ご本人のお話を聞けること大変楽しみである。

参加者二十三名

(報告・森田 美千代)

会員詩 奇跡

田村 周平

岡山の日傘村 長泉寺は日蓮宗の
小さな寺である 母の七回忌に寺
の裏山で見つけた古い石だけの墓
慶応三年没田村周平 これまで一
度も同姓同名に出会ったことがな
かった 活字でさえも それが慶
応というのだから ありそうでな
かった奇跡

この町では
太陽は海から出て山に沈む
陽が落ちてから朝日がのぼるまで
海辺にいた十七の秋
一日だけの逃避行
水平線も山の稜線も昔のまま

五十の秋も六十の夏も
過ぎていったけれど
あの夏の匂いは覚えてる
眠れない日も
夢をみない夜も多くなった
けれど目を閉じると
ぼんやりと浮かんでくる
少女の姿

生きていれば忘れていくことは多い
生きていくことは
忘れていくことかもしれない
とるに足らないぼくの人生も
ぼくにしか生きられない
つまり

I can not dream your dream

You can not live my life
ぼくがぼくなるために

いくつもの角を曲った
歴史は記憶を集めて記録され
そして誰も知らない墓碑銘だけが残って

光は
重ねていくと白になり
絵具は重ねていくと黒になる
人は年を重ねて色をなくし
ついには透明になって
誰の記憶の中にも
なくなっていく
けれど
それで完成するのだ
名もない小さな一人の人生が

◆お詫び(会報43号・正誤)

会報6頁の詩誌「Messier」グループの連詩に誤りがあり
ましたので、香山雅代さまと内藤恵子さまにお詫びし訂
正いたします。

・タイトルの「白秋」↓「白露」

・一連6行目「深淵を覗いている」わたしを覗いて

↓「深淵を覗いている」

・一連7行目「高く 高く 季節を超えて飛翔するには」

↓「覗いている わたしを覗いて」

・二連8行目9行目「言えないままに母 その母 ひい

祖母/無明長夜に花咲く」↓「言えないままに母 そ

の母 ひい祖母/無明長夜に花咲く」

・注記の4行目「FAX文章」↓「FAX文音」

会報8頁の季村敏夫の「水町百窓のこと」での三段目の
水町百窓の俳句、「滝凍てー峡は硯を失へり」↓「滝凍
てて峡は硯を失へり」

## 『街貌』創刊号について

季村 敏夫

『街貌』は姫路の同人誌である。創刊号の執筆メンバーは大塚徹、南想路、河野謙。表紙の左上に「足立巻一様」とある（末尾図版参照）。発行は一九三二（昭和七）年七月。満州国樹立の年。編集兼発行人は平田精二（姫路市忍町五三六）。君本昌久が作成した年表（『兵庫の詩人たち』一九二頁）に『街貌』（大塚徹）六月、『街貌』（平田精二）発行月なし、と二冊ある。違う雑誌と確定したのか、同一におもえるがわからない。なお同年六月に足立巻一や亜騎保らは『青騎兵』を創刊。大塚徹（一九〇八—一九七六）の作品を引く。

あさ

穹はこんなに青く晴れて、  
そよりそよりと涼しい風も吹いてくる。

ぼくは二十五。  
いまだにオンナとは結婚できず。

げつそり老けた

ははの、  
あなたの肩に抜けかかる白髪よ。

それがなにより愛しいが。ー  
ああ、それがなにより愛しいが。ー

雀は屋根で囀り、  
狭い庭のすみに苦の花が咲いて、  
貧しいものみんなみんなが  
この朝のふりそそぐ光茫のなかでゆれてゐる。

後記は大塚徹が書いている。そこに「創刊号は僕が主として編集」とある。そしてこう続く。「総合芸術誌『風と雑草』廃刊以来久しく沈滞してゐた姫路詩壇に、六月を期せずして、三つの詩誌が生まれようとしてゐる。即ち、橋本勝美君等の「古風な街」、森本清君等の「詩謡塔」。そして僕等三人の友情詩誌「街貌」。これら姫路詩壇も活気付くわけだ。」

『風と雑草』は昭和五年創刊。木坂俊平と編集する民謡誌第一次『猿』を解消、竹内武男（昭和六年日本共産党入党。神戸詩人事件で実刑）の『黒点』と合流し刊行された。『風と雑草』は権力に根こそぎ押収された幻の同人誌で、古書マーケットにまず出ない。

『街貌』が刊行される前年の八月二六日、竹内武男、小林武雄、大塚徹らが検挙される。宇治川電鉄の車掌見習だった椎名麟三（大坪昇）は、その場は逃亡したが、高輪署で逮捕され、神戸へ護送された。

足立巻一死去の翌年に神戸で座談会（杉山平一、安水稔和、伊勢田史郎、和田英子）が開催、そこで小林武雄が、昭和初年の神戸の詩人の傾向について語っている。以下、骨子を書きとめる。

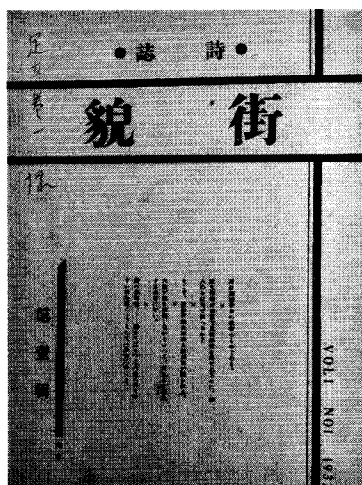
当時は民謡歌謡時代で、書く民謡、歌う民謡論議が盛んであった。詩人は投書家と中央の同人誌に加わる二つのグループに大別。大塚徹、植原繁市、八木好美、多木伸、小林武雄らは投書家で『蠟人形』『愛誦』『若草』『むらさき』などに投稿。光本兼一（昭和九年死去）編集の第一次『神戸詩人』も投書家グループの民謡や抒情小曲が主であった。大塚徹は昭和四年に『愛誦』に投稿、西條八十の選で『北海の蟹』が特選になった。一方、福田正夫の『焔』に能登秀夫ら、佐藤惣之助の『詩之家』に水町百窓、白鳥省吾の『地上楽園』には吉沢独陽らが関わっていた。

昭和八年頃になると、竹中郁らと違って貧しい姫路や神戸の投書家たちも就職、やっと生活の基盤が確立、亜騎保、佃留雄、静文夫ら居留地で働く青年はモダン

ズム詩誌（『椎の木』『詩学』など）の同人になった。小林武雄のいう投書家の情熱と交友だが、足立巻一の小説『親友記』に生き生きと描かれている。

では民謡歌謡時代とは、どのようなことか。筒井清忠の『西條八十』（中公文庫）の次の提起が補助線になるかもしれない。「従来の多くの近代日本詩史に、昭和三年は春山行夫の『詩と詩論』が発刊されモダンズム、シュールレアリスムの運動がはじまった年とのみ記載しているのは一つの巨大な錯誤であろう。両情らの新民謡運動が日本においてはブルトンのシュールレアリスムにいわば「対峙」し、強い民衆的基礎をもって存在していたことも忘れられてはならない。」

歌謡の無名性、古代の労働と共に発生した作者不詳の息吹。このことをふまえ、大塚徹らの民謡歌謡へのおもいをとらえかえす時が来ているのかもしれない。



上・詩誌『街貌』創刊号

※姫路文学館南館一階  
さんかくギャラリーで、  
「生誕一〇〇年記念・  
詩人大塚徹パネル展」  
が開かれています。  
会期は平成三十一年二  
月二十八日（木）まで。  
下は大塚徹の写真とサ  
イン。（記・大西隆志）



きつといいことがあるー内田豊清のこと

### 季村 敏夫

会報四二号で、矢向季子詩集（生没年不詳）を上梓したいと書いた。しかし編集は暗礁に乗り上げていた。作品は十五篇ほど集まったが、境涯が全くわからないからである。ある日忽然と姿を消している。彼女が関わった同人誌『暈神』創刊号（昭和十年、編集発行人、小林武雄）は神戸詩人事件の際に権力に押収された。ある日、内田豊清のエッセイに矢向季子が出ていることを知った。内田さんは長田区東尻池町の矢向季子をつたねた。また、敗戦後の詩誌『航海表』（編集藤本義一）に内田豊清と共に内田季子の作品がある。季子、これは偶然か。内田季子と矢向季子は同一人物なのか。またある日、『扉野良人から、『きりん』について書かれた足立巻一の文に内田豊清の娘さんの作品があることを知らされた。姉妹を探し出せば、矢向季子の手がかりがつかめる、確信し、八方手を尽くした。姉妹が投稿していたのは児童雑誌『きりん』（創刊昭和二年二月、尾崎書房）、当時毎日新聞大阪本社に勤めていた井上靖、竹中郁、浮田要三、復員した足立巻一、坂本遼が関わった。周囲には焼跡が残っていた。暮らしの匂いのする妹の作品を紹介したい。

ないしょく 四年 内田恵己子

前は

ふくろはり。

こんどは

ゴムぐつの底切り。

百そくで三十円。

これだけで

一日かかる。

手がいたいといって

手ぶくろをはめている。

このごろは

おかあさんの手は

ゴムのにおいがする（昭和三〇年三月）

私の会社の倉庫（阪神大震災で全壊）は長田のケミカルシューズ工場のど真ん中にあつた。次に姉の作品をみてみる。

家 六年 内田安紀子

門がある。

植木がある。

ボンボンダリアが咲く。

チョウチョやトンボが来る。

子どもべやもある。

おふろもある。

大きな家だったという。

いま住んでいる市営住宅は

よう買えないから

またどこかへ行かねばならない。

戦争さえなかったらと

わたしはいつも思う。（昭和二九年八月）

内田さんの家は神戸空襲で焼失、その後勤めていた市役所を辞め、謄写版印刷を始めた。貧困、病氣。しかし姉妹はへこたれず、詩の未来を生きました。

生きていく 中学二年 内田安紀子

「つよく生きていけば

また、きつといいことがある」

と、いう父。

家が苦しくなり

お金がなくなると

「死んだ方がましだ」

と、いう母。

それでも

「生きていけば

何かきつといいことがある」

と、いう父。

私もそう思う。

「この目で子どもたちの姿や

自分のくらしを見ていきたい」

と、いう父。

私もそう思う。

この目で私たちの

これからの姿を見てきたい。（昭和三二年）

詩は内田豊清さんの天職。子どもたちの詩心を育てた。詩作は貧困を光にかえた。

※次号は内田豊清と北園克衛らの前衛詩人協会との関係にふれてみたい。



右・児童雑誌『きりん』第2号

## 会員の詩集評

時里 二郎

北岡武司『鳩は丸い目で』（和光出版）。2018年5月刊。第四詩集。何よりも印象的なのは、居を構えた明石周辺の海や海辺の地誌に材をとった前半の詩編。「波の上を／横笛の音が漂っていた／首を斬られると夕日が赤々と／水面を照らし／血の色もかくれ／みなちりぢりに逃げた／琵琶の音のレクイエムを聴きながら／略／夕日が空に融け／彼方に沈み／群青色の海峡のむこうで／明かりの灯り灯りしているのが消え」（琵琶の音 部分）「平家物語」ゆかりの須磨の浜がたつぷりとした抒情の波の向こうに現れる詩集冒頭の一編だが、思わず声に出して読んでみたくなる。それはこの作品に限らず北岡さんの詩のすべてに共通する特徴だ。耳を通して読み手に入ってくるのは、おのずと詩話のみえないリズムが作品に巡らされているからで、この作品の場合は、「カ」行音の折り返みがほどよいリズムの波を作っているに気づく。もう一つの特徴は、かなしみや不遇や不条理に充ちたこの世界を、それでも肯おうとする息づかいが詩想の水脈にかよっていることだろうか。

井口幻太郎『みずいろの含羞』（摩耶出版社）。2018年5月刊。第七集。前詩集『奇妙な商売』の「訪れ」という、自らのつましい書齋のことを書いた詩が忘れたいが、市井の日常に寄せる眼差しのあたたかさとして穏やかなユーモアが井口さんの作品の特徴だと思つた。今度の詩集のペースになつている姿勢は変わらないが、短い詩が多くなつたせいも、日常の一点や生活の一場面や自然の一コマといったミクロの世界を切り取つて、それを一気にマクロの世界と衝突させるような作品が多い印象がある。「柿の実がひとつ／空の碧（あお）さに耐えている／たつた一つで熟れていく／その静けさに／遠いとおい／地球の秋を想い出す」（果実）全。日常の遠近法をくつがえして、そこに隠されているものを掬い取る手法はもちろん健在だが、前詩集に色濃くあつた市井の人々の機微をほどよ

い哀感と身に染みるユーモアで包んでみせた小さな挿話性のある作品はなりをひそめている。その「市井」に代わつて、「地球」や「天」といったよりマクロな遠近法を詩に取り込むような試みが印象に残る。

香山雅代『雁の使い』（砂子屋書房）。2018年6月刊。第十詩集。香山さんの詩は現世にあつて現世にない。その間（あわい）の非在の時空にある。ちょうど、それは能舞台の時空に似ている。修辭を凝らした能の台詞や、鼓や笛の奏でる音楽は、あの舞台空間のためにあり、そのなかで息づくように作られている。香山さんの詩語もそれと同じ構造を持つた場を前提にしている。従つて、どうしても読み手のほうで、「能舞台」を設ける必要がある。そのことが、香山さんの詩を読みにくくしていると言えるかもしれない。しかし、今度の詩集には、「能舞台」ではなく、現代演劇の風通しのよい舞台のなかで息づくような作品が目を見く。例えば「呼吸する 虚空」。紙面の都合で引用できないが、言葉の響きに繊細な心配りが見えるのはいつもの香山さんらしい技巧だが、「呼吸する 虚空」といった言葉遊びふうの使い方や、おしまいに凌霄花の花の形状からの連想なのか、「御嶽山」の噴火を持つてくるあたりのイメージの飛躍など、詩の材料も含めて、ほどよりユーモアを交えた、風遠しのよい舞台空間のあかみが新鮮だ。

永井ますみ『万葉創詩―いや重（し）け吉事（よごと）』（竹林館）。2018年7月刊。

永井ますみ『永井ますみの万葉語り』（竹林館）。2018年7月刊。

『万葉創詩』のほうは第十一番目の詩集になるのだろうか。この詩集は、万葉集の歌をおのの作品に織り込んでいるのだが、あとがきに言うように、歌の解釈ではなく、「奈良時代当時の時間空間に身を置いて作つた創作」。例えば「角島（つのしま）の若女（わかめ）」という作品。「角島の瀬戸の若布（わかめ）は人の共（むた） 荒かりしかど わが共は和布（にきめ）」という巻十六の和歌を材にしているのだが、わかめ採る女が足を滑らせて潮に流されそうになるのを、男が助けあげる。「太い腕／褐色の胸／男の望むまま／そう

いう関係になるのは必然でもありません／男は船を操るのを得意とし／大きな声で歌います／私の恥ずかしがるのをものともせず／歌います／角島は瀬戸の若布は：。永井さんは万葉集の歌を自在に膨らませて、歌のなかに閉じこめられていた万葉人たちに、この世界の空気を吸わせてよみがえらせる。もちろん膨らませるために、きちんと当時のことを入念に調べ、「現場主義」を大切にしているのは、「永井ますみの万葉語り」を読むとよくわかる。また、このエッセイ集には、永井さんの万葉集についての熱い思いがたつぷりと語られている。万葉集のなりたちを家持の個人編集ではないかと推理し、家持の足取りを克明にたどり、万葉集の各巻の歌の特質を明らかにし、大伴氏はもちろん、天智、天武、藤原氏の家系図を手作りしたり、エクセルを駆使して各巻の歌の分析までやつてのける。その甲斐あつて、この一冊で万葉集の面白さや魅力が十分に伝えられている。万葉歌とコラボした『創詩』といい、私的万葉集小事典ながらの『万葉語り』といい、まさに快事と言つていいだろう。

月村香『蜜雪』（思潮社）。2018年7月刊。「添え書き」には、フランス語で詩を書き、それに「そつと、日本語をフランス語の訳としてではなく、別の詩編として添えてみました」とある。日本語の作品は、横書き、段落も句読点もない。「わたしはいつでも自分の居場所を確認しておきたいのちいさな女の子が脇にかかえるくらい大きな本をわたしはちいさく手に隠してその本はわたしをわたしへと導くわたしは聞くのわたしはどことわたしはどことまるで旅行者がいつも人に聞くように（以下略）」（夏）作品のすべては、このように「わたし」の、脈絡の辿りづらいモノログで埋め尽くされている。読み手は、「わたし」の意識の気まぐれな散歩に付き合うことになるのだが、その散歩ないは、意識の彷徨は、何処まで行つても言葉の深まりを見せず、表層を戯れるばかり。そういえば話者の「わたし」も登場人物も、どこか無国籍で、まるで言葉から捻られた記号の衣服を装っているようにも見えないこともない。もちろん、それが月村さんの詩の方法なのである。はじめに言葉があり、言葉を通して

のや世界や人が現れる——極端に言えばそのような詩観に近いのか？

以倉紘平『気まぐれなペン』（編集工房ノア）。2018年7月。副題に『アリゼ』船便り」とあるように、主宰する詩誌の連載エッセイ『船便り』をまとめたもの。「アリゼ」の創刊が1987年9月だから、三十年の歴史を刻む。創刊号には、「未知の島の静かな入江に碇泊して積荷をおろす。詩人たちの交易がはじまる。詩を書く喜びと詩にめぐりあえる喜び。それがすべてである。俗なるものはこの船といっさい無縁だ。私たちがめざさなければならぬのは詩の（成熟）である。船は、航海の長い時間、私たちのポエジーを育み（成熟）に必要な静けさとときびしさを提供してくれるだろう。」なお「アリゼ」とは「貿易風」を意味するフランス語とのこと。三十年のあいだの折々の話題は、詩の状況に対するものや親しい詩人たちのこと、旅のことなどさまざまだが、こうやって読んでみると、おのずと以倉紘平という詩人の人柄や思想の風というものがうかがえて興味を尽きなかった。

由良佐知子『遠い手』（澤標）。2018年8月刊。

第二詩集の『雲の階段』から十五年を経ての第三詩集。「くしゃと丸めて練ったか／唇の半分はどこへ／鍋底の焦げと一緒に流したか／早送りの音声もどかしい／（略）／雨に猫と線香が／雑じるにおい／台所の隅で里芋が芽を伸ばしている／ひそり生きのびたもの／祝宴をはる半夏生／略」（「半夏生」部分）言葉を繰り出すときの強さが、引き締まった緊張感を生み出し、表題作の「遠い手」も、「こんなに遠くに来てしまった／私は一本の手」と、いきなり詩を発火させるモチーフの提示から始まる。この歯切れのよい強拍が、行間の余白のいさぎよさを生み、清廉な情感に充ちた詩の世界を作っているのに気づかされる。同時に、その発語の強さは比喩の切り口の鮮やかさにもあらわれている。母の介護のうちに、入れ歯をとったときの顔立ちを「母はかわいらしく／表札をはずされた顔になる」（「泣き笑い」とか、「これが河骨／泥の中の根茎は／どこまで延びているのか／さまざま八月の骨のよう

に」（「河骨（こうほね）」、「茎立ちはじめた大根／鎌で葉を落とす／春の首を切る」（「春の首」）など、迷いのない言葉の運びは、なんとと言っても由良さんの詩の特質と言っている。母や叔母の介護の日々のなかにあって、「日常は記憶にも残らない些事の積み重ねです。折々、水面に浮かびあがる泡粒をひとり待つ時間があります。」とあとがきにある。

高木敏克『港の構造』（航跡社）。2018年8月刊。

小説十編を収めた短編小説集だが、表題作の「港の構造」ほか二編の中編が三本の柱。表題作「港の構造」は、元町商店街の奥まった路地にある、照明のないワールームマンションが舞台。「この部屋の闇はただの闇ではない。（略）このカオスに包まれると本当に幸せな気分になれる。（略）まるで死んでいるようで、絶対的な自由というもおのを満喫できた。／ぼくはようやく世界のスイッチを手に入れたのだ。世界を消すことも自分を消すことも出来るようになった。」主人公はここで「充実した闇の中で深い夢を見るために、そして深い記憶を辿るために」その闇の部屋を異界の入り口として、次々と映し出される過去の記憶の魔界の世界に彷徨う。かつての活動家の仲間だった「山谷繁夫」との過去が特に重要なのだが、後は本書でどうぞ。この中編三作の他に小惑星のようにちりばめられた掌編のなかに、「記憶の森」という佳品が味わい深い。神撫の森に囲まれた施設にいる認知症の母を訪問するのだが、そのたびに、「母は「僕」を、「僕」の見知らない叔父や祖父と間違える。最初はとまどっていた「僕」は、いつかしらそのことを背うようになる。「その時、僕には気づいたことがある。それは母がすでに記憶の森に住んでいて、しだいに鳥になりつつあることだ。／それから僕は決めた。（略）母の弟や父親になって語り続けよう。母はすでに記憶の森に住んでいるのだから、僕もその森の記憶となり、優しく母に語りかけようと思つた。」こには「記憶」と「森」が重要なメタファーになっているが、「森」が闇を含んだトポスであることを思えば、「港の構造」のあの闇の部屋のメタファーとも通底していることは間違いないだろう。

宮浦久子『マスクをする』（澤標）。2018年8

月刊。第一詩集。日常生活のなかで出会ういろいろな人生の節目やそこに潜むひとつひとつの機微に迷い、後悔し、あきらめ、歯を食いしばり、かなしみ、憤り、自分を励まし、同じ世の中を生きる同胞に共感し、世の中の不条理にも言葉を惜しまない。ふと人生の来し方を振り返る作品には、哀感とともに、自らを肯おうとする心情が陰影深く描かれている。また、「万年筆」「父に会う」など、父のことを作品にしたものもい。宮浦さんの表現の特徴は、言葉を飲み込んで、余白に心をにじませること。言葉を飲み込むとは、自分の心の見えなかつた深みに気づくことにほかならない。飲み込むところまで言葉を追い込まなくてはならない。「真つ直ぐに届く言葉を探しあぐね／じれったいほど空を見る」（「一月／私のノート」）。自らの生活や日常のなかに詩を見いだしていこうとする、静かだが、ゆるぎない姿勢につらぬかれた好詩集だ。

以倉紘平『遠い堂』（編集工房ノア）。2018年10月刊。第七詩集。詩集前半は、九年前に肺がんで亡くなった愛娘をモチーフにした作品をおさめる。あとがきには「亡くなった娘の面影が、私のところに、強く生きていて、私のいのちと交ざりあって、一種の共同制作のように、作品が生まれたと考えるのが正しいと思つています。」とある。詩の究極のすがたは相聞と挽歌に尽きることをあらためて思い出させる痛切な絶唱が並ぶ。「娘と病院で暮らした二百七十日／ぼくの人生はあらかた終わってしまった／これは戦争だと思つて戦つたが／助けることができなかつた／ぼくはこの上なく不甲斐ないみじめな父親であった／もう死んでしまつてもよいわけだが／娘の生きる場所は／生きていたものこのころの中にしかないと思うので／せめて生き続けて／思い出してやりたいのである。」（「ふりだしにもどつて」部分）詩編のなかで最も長い六十行に近い作品だが、詩を書いていることさえ忘れてしまつて、ただみずからの思いのかぎりをことばに託そうとしていた詩人の魂に深くうたれる。また、まさにこの時のために、以倉さんは若い日に詩というものを選びとっていたのではなかつたかと胸をつかれる思いにとらわれさえした。



## ◇常任理事會報告

■八月四日第二回常任理事会、私学会館にて。常任理事十名出席。会計報告及び入退会報告。アンソロジーについて、印刷所・見積り検討。会員負担は四千円とする。七月二十八日の読書会報告、当日参加者は二十三名。次回の日程。取り上げる詩人など検討。「ボエム&アートコレクション」の搬入搬出について。文学紀行の場所検討。「詩のフェスタ」は講演・伊藤比呂美氏「カタル、ウタウ、ノロウ」に加えて、平田俊子氏との対談「詩を生きるということ」。詳細確認と朗読についての検討。次回に役割など決定。HPが稼働、エッセイなどの投稿募集。

■九月二十二日第三回常任理事会、私学会館にて。常任理事九名出席。会計報告(会費納入状況)及び入退会者報告(入会者二名)。アンソロジーについて、原稿締切り十月十五日の確認。HPに会の近況など掲載。次回読書会は十二月一日(土)神戸教育会館にて、取り上げる詩人・藤富保男、チューター・坂東里美、参加申込み締切り十一月二十二日。「ボエム&アートコレクション」のチラシ作製状況報告。文学紀行は「北野町散策」「福原京を巡る」のいずれか。「詩のフェスタ」役割分担と詳細確認。

■十月二十七日第四回常任理事会、私学会館にて。常任理事十名出席。会計報告及び、三名の入会報告。会報は十二月一日発行予定。十一月末に発送。アンソロジーについては十一月に作品の追加催促。十二月初めに印刷所へ、中旬に初校予定。完成は二月下旬予定。ホームページの閲覧は会員以外も多く、常に新しい情報を発信。「ボエム&アートコレクション」のチラシの最終検討。展示出品者は二十三名。読書会について、取り上げる詩人・藤富保男、チューター・坂東里美、出欠葉書は発送済。文学紀行は三月十七日「平野散策コース」に決定。地下鉄大倉山駅集合で約二時間の散策。会費二千円(バス代は別)三月十一日申込み締切りとする。理事選挙について、投票方法は十二名以内の

記入とし、会報に同封の用紙にて投票。一月八日締切、一月十一日開票。選挙管理委員は神田、野口、玉井、他会員一名。次回常任理事会にて結果報告。総会日程は五月六日(月・祝)ラッセホールにて。その他、関西詩人協会からのイベント呼びかけ等。

## ◇事務局より

会員発行の著書、詩誌などの出版物は事務局へお送りください。詩に関するイベント等の案内もよろしくお願ひします。会員の動静の連絡もお教えください。ホームページの充実を図るためにも、会員からの多くの詩についての情報をお待ちしています。

## ◇会計より

今年度の会費未納のかたは速やかにお納めください。年会費は4千円です。  
郵便振替口座 00920・9・111243  
口座名 兵庫県現代詩協会

## ◇会報担当より

会報へのエッセイや詩の投稿をお寄せください。また、会員の受賞や、活動報告などの情報も是非会報担当までお送りください。どうぞよろしくお願ひいたします。  
会報担当・大西隆志  
〒670-0061 姫路市西今宿3-1-9-702  
メールアドレス furadou@extra.ocn.ne.jp  
(アチラクに) furadou\_t@gmail.com

## ◇新入会員をご紹介ください。

人生において詩歌の力や、創作への意欲は人生を豊かにしてくれます。兵庫県現代詩協会は詩に関する幅広い活動も行っており、文学紀行などのお互いの交流を図るイベントもあります。詩を愛する方々の集いの場として、新たなつながりを願っています。

・担当の尾崎美紀・神田さよまでお知らせ下さい。  
また住所変更、退会の会員は事務局までご連絡下さい。

・連絡先・入退会担当/尾崎美紀 事務局/神田さよ

## ◇他団体の著書・会報・詩誌

※受贈お礼申し上げます。

福島県現代詩集2018 (福島県現代詩人会)  
栃木県現代詩年鑑2018 (栃木県現代詩人会)  
いしかわ詩人11集 (石川詩人会)  
2018年刊詩集(徳島県現代詩協会)  
山梨県詩人会会報21号  
長野県詩人会会報138号  
いしかわ詩人46号 (石川県詩人会)  
福島県現代詩人会会報118号  
埼玉詩人会会報86号・87号  
すずかけ373号・377号  
兵庫県歌人クラブ会報199号  
詩界通信83号・84号 (日本詩人クラブ)  
とっとり詩人38号 (鳥取県現代詩人協会)  
中日詩人会会報192号・193号  
岡山県詩人会会報171号  
福岡県詩人会会報26号  
茨城県詩人会会報27号  
宮城県詩人会会報90号・91号  
大分県詩人会会報152号  
福井県詩人懇話会会報98号  
日本現代詩人会会報150号・151号  
秋田県現代詩人協会会報58号  
岐阜県詩人会会報11号  
詩の会復刊42号 (宮城県詩人会)  
いちご通信21号 (大分県詩人連盟)  
群馬詩人クラブ会報306号  
中四国詩人会ニューズレター44号 (中四国詩人会 岡隆夫)

## ◇読書会について

第十五回読書会・十二月一日(土) 十三時〜十五時、教育会館五〇一号で開催。チューターは坂東里美氏。テーマは「藤富保男 アバンギャルド・エッセンス」、ユニークな実験詩などを書いた藤富保男の詩を通じ、凝り固まった詩の概念が崩れる快感を共有します。

◇会員の発行書

2018年7月〜2018年10月  
永井ますみ詩集『万葉創詩ーいや重け吉事』竹林館  
『永井ますみの万葉かたりー古代プロガー家持の夢』竹林館

月村香詩集『蜜雪』思潮社  
由良佐知子詩集『遠い手』濤標  
高木敏克小説集『港の構造』航跡社  
宮浦久子『マスクをすると』濤標  
以倉紘平詩集『遠い螢』編集工房ノア  
時里二郎詩集『名井島』思潮社  
北岡武司詩集『時のなかに』春風社

◇会員の詩誌

2018年7月〜2018年10月  
多島海33号(江口節)

現代詩神戸262号(永井ますみ)  
アリゼ186号(以倉紘平)  
Poetry Edging 41号(寺田操)  
とらるかまら24号(北岡武司)  
鶴鶴10号(江口節)  
ガーネット85号(神尾和寿)  
西宮芸誌・表情27号(香山雅代)  
Contoralto 39号(坂東里美)  
個人誌・鳶が城便り鳥74号(足立勝歳)  
時刻表4号(たかとう匡子)  
月刊めらんじゅ135号〜137号(大橋愛由等)

※会員の発行書と会員の詩誌の発行年月に關しては若干差異  
がありますが、ご了承お願いいたします。

◇会員の動静

・たかとう匡子  
平成三十年度神戸市文化賞受賞。  
九月八日、(社)日本詩人クラブで講演。(於・早稲田  
奉仕園リパティールホール)  
演題「なぜ女性詩人ノートを書いたか」  
・玉川侑香  
平成三十年度神戸市文化活動功労賞受賞。

◇退会

中根美津子・亜衣みずよ

◇入会

・藤本紘士(本名・藤本達夫) 〒661-0985 尼崎市  
南清水1-3-3  
電話080(4230)6971  
同人誌「白鴉」「babel」所属

・吉本弘子 〒654-0076 神戸市須磨区一ノ谷町1  
丁目1-3-302  
電話078(742)7100

・田伏裕子 〒651-1113 神戸市北区鈴蘭台南町1  
-1-2-507  
電話078(94)1207

詩集『塩と絆』生田裕子(当時のペンネーム)

・田村周平 〒678-0235 赤穂市上飯屋南22-2  
8-103 電話0791(42)0687

詩集『アメリカの月』  
福田正夫賞、半どんの会現代芸術賞受賞

・張華(本名・井上栄一) 〒652-0881 神戸市兵庫  
区松原通4丁目2-1-103  
電話078(671)1889

所属・現代詩神戸研究会・プラタナス  
著書『母の姿』

◇イベント案内

生誕一〇〇年記念・詩人大塚徹パネル展  
会期・平成三十年十一月二十三日(祝・金)〜平成三  
十一年二月二十八日(木)午前九時〜午後五時  
会場・姫路文学館 さんかくギャラリー(南館一階)  
観覧無料  
電話079-293-8228  
ホームページ <http://www.himeijungakukan.jp/>

※大塚徹について・明治四十一年(一九〇八年)、姫路市堺町に  
生まれる。旧制姫路中学三年生の時、水泳の際の事故で、脊椎  
を損傷し、三年にわたる闘病生活を送る。足に麻痺が残る、の  
ちに発症した脊椎カリエスにより、生涯その痛みと闘いながら  
生きた。闘病中に「啄木歌集」に出会い、文学にめざめ、二十  
一歳のころから全国詩誌「愛誦」などに投稿をはじめ、西条八  
十や生田春月の特選となるなど、瞬く間にその頭角を現し、投  
稿家として全国にその名を知られる存在となった。昭和七年  
(一九三二年)篠田あきと結婚。やがてプロレタリア文学に傾  
倒し、昭和十六年には検挙され、十ヶ月間拘留。昭和二十年、  
終戦の年の暮には芸誌「新濤」を創刊し、焼け野原となった  
姫路の街にいち早く文学の灯をともした。堺町の大塚家には  
常に多くの文学好きの若者が出入りし、その中には、若き日の  
桂米朝もいたという。民謡や歌謡曲の作詞も得意とし、「あゝ  
姫路城」(唄・春日八郎)や「三ツ山音頭」(唄・小唄勝太郎)  
などいわゆる「当地ソング」を数多く手がけた。昭和三十八年、  
播磨国総社に詩碑が建立。昭和五十一年(一九七六年)に六十  
八歳で亡くなる。翌年、仲間たちの手によって『大塚徹・あき  
詩集』が刊行された。

※詩人大塚徹パネル構成

- 1. 挫折からの出発 2. 投稿家時代 3. 疾風怒濤の青春
- 4. 放蕩息子の帰還 5. 終戦 悔恨からの再生 6. 杏の木
- 7. 城を詠う、郷土を詠う

【展示資料】投稿雑誌「愛誦」詩誌「猿」「風と雑草」「新濤」、  
詩集、自筆色紙など 森崎伯畫画、徹詩の色紙、内海敏夫によ  
る徹肖像画。

★兵庫県現代詩協会事務局／神田さよ

〒663-8006 西宮市段上町6-14-4

電話 0798(53)0686

★会計／野口幸雄

〒667-0846 神戸市灘区岩屋北町

4-4-5-902

★会報編集／大西隆志

〒670-0061 姫路市西今宿三丁目1-9-702

★印刷所／社会福祉法人 新生会 新生会作業所

〒663-8006 西宮市染殿段町2-11